

純輸出は 7～9 月期成長率の低下要因に（貿易統計）

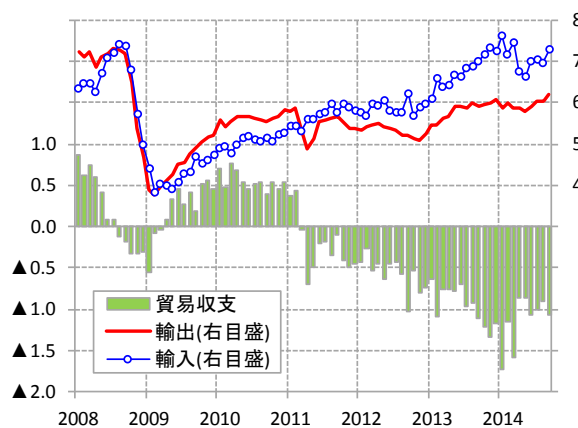
7～9 月期の輸出は、アジア向けが増加に転じて全体を押し上げたものの、引き続き海外生産シフトの影響が回復の足枷となった。一方、輸入は、消費増税直後の落ち込みに概ね歯止めが掛かった。この結果、貿易赤字縮小の動きは小休止となり、また、実質成長率（前期比）に対する外需（純輸出）の寄与度も 4～6 月期の 0.8%Pt から 7～9 月期はゼロ近辺まで大幅に低下した見込みである。貿易収支の改善基調は維持されていると見られるが、そのペースは当面緩慢なものにならざるを得ないであろう。

貿易赤字縮小の動きは小休止

9 月の貿易収支は、輸出が前年同月比+6.9%の 6 兆 3,832 億円と今年 2 月（+9.8%）以来の強い伸びとなったが、輸入も同+6.2%の 7 兆 3,415 億円と比較的強い伸びとなったため、赤字幅が前年同月の 9,432 億円から 9,583 億円へと 151 億円拡大した。

季節調整値で見ても、9 月の輸出は前月比+3.1%となったが、輸入が+5.0%と輸出を上回る伸びとなったため、貿易赤字が 8 月の 9,124 億円から 9 月には 1 兆 701 億円へと拡大した。輸出は 4 ヶ月連続で増加し、ようやく 2008 年 10 月以来の水準まで回復してきたが、輸入も消費増税直後の落ち込みに歯止めが掛かり、今年 3 月以来の水準まで持ち直している。このため、貿易収支は、2011 年 3 月から今年 3 月にかけての赤字拡大傾向に歯止めが掛かったとは言え、依然として月▲1 兆円前後のレベルで一進一退が続いている。

輸出入と貿易収支の推移（季節調整値、兆円）



（出所）財務省

これにより、7～9 月期の季節調整値ベースの貿易収支は、輸出が前期比+3.9%と 3 四半期ぶりに増加したが、輸入も同+4.3%と僅かながら輸出を上回る伸び（2 四半期ぶりの増加）となったため、赤字額が 2 兆 9,993 億円と、4～6 月期の 2 兆 7,994 億円からやや拡大した。1～3 月期の 4 兆 4,672 億円から大きく減ってはいるが、依然として年率で 10 兆円を超える赤字幅が続いている。

7～9 月期の輸出：ASEAN 向けや NIEs 向けが増加するも、米欧向けが不調

7～9 月期の輸出は前年同期比で+3.2%と、4～6 月期の+0.1%から増勢が強まった。これを価格要因と数量要因に分けて見ると、価格が+2.9%と円安進行に伴い伸びを強めたほか、数量も+0.3%と 2 四半期ぶりのプラスに転じ、僅かではあるが輸出の増加に寄与した。

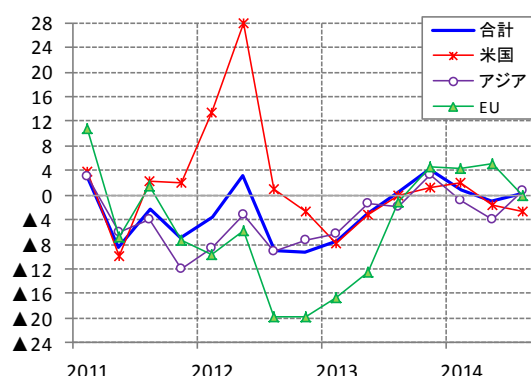
この数量の増加について仕向地別に見ると、アジア向け（4～6 月期前年同期比▲3.9%→7～9 月期+0.7%）がプラスに転じ、全体を牽引した。ただし、中国向け（+1.6%→+0.4%）の増勢は弱まっていることから、ASEAN 向けや NIEs 向けの増加が輸出全体を押し上げたと考えられる。一方、米国向け（▲1.7%→

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、伊藤忠経済研究所が信頼できると判断した情報に基づき作成しておりますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。記載内容は、伊藤忠商事ないしはその関連会社の投資方針と整合的であるとは限りません。

▲2.7%)は減少ペースが強まり、EU 向け(+5.2%→▲0.2%)は減少に転じた。このため、輸出全体の伸びは僅かにとどまった。米国向けについては自動車などの海外生産シフトの影響、EU 向けについてはユーロ圏景気の停滞の影響が出ていると推察される。

なお、アジア向け輸出については、金額ベースでも4～6月期の▲1.3%から7～9月期には+3.6%とプラスに転じたが、これを財別にみると、半導体等電子部品(4～6月期前年同期比▲5.6%→7～9月期+3.1%)が中国向けも含めて増加に転じた。これには、スマートフォン分野の新製品発売が追い風になっていると見られる。そのほか、金属加工機器(+34.7%→+41.8%)、科学光学機器(+8.0%→+10.2%)も伸びを高めた。

仕向地別輸出数量の推移(季節調整値、2010年=100)



(出所) 財務省

7～9月期の輸入：環境税引き上げによる下押し圧力一巡も、生産弱含みに伴う影響が出始める

7～9月期の輸入は前年同期比+2.4%と、概ね4～6月期(+2.7%)並みの伸びを維持した。環境税引き上げに伴う鉱物性燃料の落ち込みに取り敢えずの歯止め(4～6月期前年同期比▲2.7%→7～9月期+2.5%)が掛かったことが大きく寄与した。ただし、生産活動が弱含む中、鉄鉱石などの原料品(+4.9%→▲4.0%)がマイナスに転じたほか、化学製品(+7.3%→+4.0%)や半導体等電子部品(+13.5%→+3.4%)の伸びも鈍化。加えて、電算機類(+11.7%→▲2.6%)がWindowsXPのサポート終了に伴う駆け込み需要の反動により減少に転じた。さらに、消費増税後の衣料品(▲5.7%→▲3.0%)の減少が続いた。

なお、価格要因と数量要因に分けると、価格(4～6月期前年同期比+2.1%→7～9月期+3.0%)が伸びを強めた一方、数量(+0.5%→▲0.6%)は4四半期ぶりにマイナスに転じた。ただし、数量について、当社試算の季節調整値では、4～6月期の前期比▲4.6%から7～9月期には▲0.3%となっており、大幅な落ち込みには足元で概ね歯止めが掛かっていると見ることもできる。

7～9月期成長率に対する外需寄与度は前期比ゼロにとどまった可能性

以上見てきたような輸出入の動きは、実質GDP成長率¹の外需(純輸出)の寄与度が、4～6月期の0.8%Ptから7～9月期は大幅に低下した可能性が高いことを示唆している。基礎データが全て出揃う前のラフな試算ではあるが、当社は現時点で、サービス収支の赤字拡大も踏まえ、7～9月期の外需寄与度が前期比でゼロ(0.0%Pt)にとどまると予想している。

貿易収支の先行き：改善ペースは引き続き緩慢に

貿易収支の先行きについてであるが、基本的には、海外需要の持ち直し(米国堅調、ASEAN復調)やスマートフォンの新製品効果に伴い、輸出が持ち直し傾向を維持し、貿易収支も改善していくと見込まれる。ただし、海外生産シフトに伴う輸出抑制圧力が趨勢的に持続するため、少なくとも当面は、収支改善ペースの緩慢な状況が続かざるを得ないと予想される。

¹ 11月17日に内閣府が1次速報値を公表する。

また、こうした緩やかな改善見通しの攪乱要因として、中国や欧州の景気動向が輸出に及ぼす影響（主に収支悪化リスクと想定）、国内景気の回復力と輸入への影響（上下双方向のリスク）には、引き続き注視していく必要がある。